

# 説話体作家の登場

——物語としての

竹村信治

(たけむら・しんじ)

「説話体作家」と聞いて想起される名はさまざまであろうが、ここでは「説話」なるものの近代史をにらみながら、その二・三の登場場面をたどることとしたい。

## ■明治初期の「説話」——「西洋列女伝」から

明治12 (1879) 年11月25日開版の『西洋列女伝』(宮崎嘉  
國抄訳、上下二冊、錦森堂蔵版)には、計5例の「説話」の  
語が見える。それらを本書の原拠 Elizabeth Starling 著  
“Noble Deeds of Woman — Examples of Female  
Courage and Virtue” (1848, London) に用いられた語と  
対照して示すと、次のようになる。

○「暫く説話せし後」(上・孝行6)

After some little private discourse with her

◎「此の如き説話の為に」(上・孝行6)

on that account

物語としての

竹村信治

(たけむら・しんじ)

「アルバーチが右の説話をなせし間」(下・貞操15)  
As Alberti was giving me this account

◎「茲に又右の説話と同一く」(上・孝行7)

From the preceding illustrious sample of the  
power of filial affection

▼「左に挙る所の最も人心を感動すべき説話」(上・孝行  
9)

the following very pathetic narrative of that  
event

その他「はなし」およびそれに類する訓を含む例には、

○「談話するを聞くに」(上・友愛6)

from the conversation

◎「「奇譚」」(上・孝行1)

a remarkable example of filial piety

「古来友愛の尤も深くして感ずべき」話あり」(上・

友愛6)

the following story, which is one of the most pathetic and interesting examples of sisterly affection on record

「最も人心を感動すべき一話」(下・慈母<sup>3</sup>)

a touching example of maternal affection

◎「一奇譚」(下・貞操<sup>5</sup>)

a most touching instance of affection

◎「ホレイン・クワーターリー・レビュー」と云へる雑誌中に「奇譚を載たり。」(下・慈母<sup>4</sup>)

A writer of the "Foreign Quarterly Review" relates the following anecdote of the plague

原拠の語彙と訳語との不対応が目立つが、「はなご」「ものがたり」が談話行為 (discourse, conversation ○印) と話譚 (◎印) の両義に用いられ、「説話」も両様に使用されてゐることがわかる。話譚義例で最も我々の興味をひくのは、narrative of that event の訳語としての「説話」だろ。また「説話」が account (報告) sample (事例) の訳語であり、「一奇譚」が example (例) instance (実例) anecdote (逸話) の訳語、「一話」が the story which is one of the examples of ... on record (例話) の訳語とされてゐるのにも注意される。これらは、記号「説話」の内容が、出来事の語りであり、奇譚・逸話として報

告・実例・ためしの意義をになうものと認知されてきた事情を教える。あらに、

▼「抑々此婦人は微賤なる者なれども終身其道德の高きは小説に載する所のジェニーザンスの品行に彷彿たる者にて」(上・友愛<sup>5</sup>)

This humble individual practised in real life the virtues with which fiction has invested the imaginary character of JEANIE DEANS.

の事例をも勘案するならば、〈小説〉≡ fiction、〈説話〉≡ narrative of that event, anecdote, account との差異化も果たされてゐたと知れる。

原著序文の冒頭には次のようである。

女性の優秀さについて物語るあちこちの記録 (scattered records) を丹念に読むなかで、私は心地よき (pleasure) を感じた。その心地よきは、一つの面白い選集がそれらの記録から作れるかもしれない、そしてそれは教訓的 (instructionive) というだけでなく実用的 (useful) であることを自ずから示すだろうといふた思ひな私を駆り立てた。格言 (precept) よりも事例 (example) の方がすぐれてゐるといふのはよく言われることだが、それがこの思ひを後押しし、人生におけるさまざまな状況や試練を前にした時に最良の糧となるものとして、以下の説話 (narratives) が選ば

れていった。(取意)

記録繙読の愉快、そこから生ずる説話集編纂への意欲、格  
言にまさる説話の意義への信頼、説話集編纂に目論まれる  
現実的効用(認識媒体の提供)。これは、いわば説話集編  
者による著述モチーフ、説話観の開陳といったものだ  
が、訳書の序文には次のようにある。

此の書は……と題せる書中より抄訳するものにして専  
ら婦女子に之を讀しめて以て其志氣を興起せんことを  
希ふなり。……今此の書の如きは僅々たる小冊子と雖  
も、其孝行の部は以て孝行の心を起すべく、其貞操の  
部は以て貞操の心を興すべし。其他友愛の部、慈母の  
部ともに之を誦読体認し、其躬に行ひ得は、亦以て婦  
女子の義務を尽すに足りんか。(下略)

両者序文には、発話の地平(性差や著述企図)の異なり  
に由来する差異があるが、それらを差し引いてみれば、  
〈説話〉語りの意義や効用に関するほぼ同様の理解が見て  
取れよう。また、訳書の名に「列女伝」が採用されてい  
る所には、漢土史書「列女伝」部や「古列女伝」に擬する意  
図も窺え、「伝」の一語に囚われて穿てば、伝承性をめぐ  
る〈説話〉理解もそなわっていたと推しうる。

### ■ 翻訳の言語場と 説話体作家

もちろん、「西洋列女伝」の語例から察せられる叙上の  
〈説話〉観を明治初期のと一般化できるかどうかは吟味を

必要とする。周知のとおり、明治7(1874)年11月2日発  
刊の『読売新聞』に当初もうけられた「説話」欄の自身  
は、第1号に見るようにほとんど随想(「読売新聞百年史」  
資料・年表編には「解説欄のはじめ」とある)と称すべき  
ものである。「西洋列女伝」から推察した〈説話〉観に  
応ずる記事はむしろ「新聞」欄にあり、ここでの「説話」  
用法は文字通り「はな」= discourse(談話)なのである  
(同朝「怪談牡丹灯籠」序詞の「説話」用例も同)。「西洋列女  
伝」の言語場の吟味を必要とする所以だが、これには菊池  
大麓訳「修辭及華文」(チェンバー「国民須知」、明治12年5  
月)の、

心志ヲ鼓舞激励スル事業ノ説話、或ハ辛クシテ虎口ヲ  
脱シ水火ノ変故ニ遭遇シ注眸手ニ汗スル如キノ状、或  
ハ読者ヲシテ痛惋腸ヲ断タシムル境、或ハ初メニ艱難  
辛苦ヲ經歷シテ終リニ康榮ヲ享クルニ至ル男女離合ノ  
情話等ハ、能ク人ノ心意ヲ奪ヒ、其本境ヲ脱シテ夢境  
ニ入ルノ想アラシム (史詩)

が参考にならう(他2例も同用法。右引用は坪内逍遙「小  
説神髓」にも所見。これは narrative of the event = 「説  
話」の語義が対応する。「修辭及華文」はその冒頭に、

而シテ此文学ノ包括スル所博シ。夫ノ詩歌ノ著作ヨリ  
散文ノ伝話、細説、批評等ノ事ノ天人ニ関スル者并ニ  
歴史編年記伝、人間ノ崇福ニ関スル教道ノ談論、人ノ  
品位事業行為ニ属スル賛論意見等ノ、或ハ嘆シ或ハ歎

シ或ハ喜ヒ或ハ怒ルベキ者、皆此中ニアリ。且ツ定時  
 発兌ノ雑誌ノ如キモ亦皆此部類ニ属スヘシトス。  
 と記すが、この「文学」についての広範な規定も、「西洋  
 列女伝」中、

「ジェムソン女が著したる目耳曼国技芸文学及び風俗  
 の略説と題せる書中に」(上・友愛<sup>6</sup>)

Mrs. Jameson, in her "Sketches of Art, Literature, and Character in Germany"

とある「文学」の訳語に対応しているよう。「修辭及華文」  
 は文部省「百科全書」の一つとして出版されたが(柳田泉  
 『西洋文学の移入』等)、『西洋列女伝』との訳語の対応には  
 そうした事情も関係しているのだろうか。とまれこうし  
 て、叙上の「説話」用例をもつ『西洋列女伝』の言語場  
 は、洋学とその翻訳の世界にかかわるといえそうである。

洋学と翻訳の言語場では、よく知られているとおり、数  
 多くのテキスト、特に小説テキストが訳出されたとおり、その  
 詳細は石川巖撰『明治/初期』戯作年表、柳田泉「年代  
 順に見た西洋文学の移入」(前掲書所収)、明治文学全集79  
 『明治芸術・文学論集』、同7『明治翻訳文学集』「解題」  
 などがよく教える。それらには、冒頭「爰ニ説キ起ス話柄  
 ハ」末尾「……ニ別レテ英国ニ帰リ子孫繁栄シテ其家倍々  
 盛昌ヲ致セリト云爾。」(明治11年「欧州ノ奇事花柳春話」)、  
 冒頭「茲ニ説起ス一場ノ怪談アリ。」末尾「嘆キシハ夢カ

ト思ハル、バカリナリトゾ」(明治13年「開巻ノ驚奇」龍動  
 鬼談)と、首尾が「説話」語りの体裁をとるものも多い。  
 また、訳者たちの多くは「奇事」「奇譚」の興に引き寄せ  
 られた人々でもあった。ここではそうした訳者たちの心  
 意を伝え、「説話」の語も見える明治7年「西洋ノ孝子」  
 流別奇談」の序文をとりあげておこう。

方今西洋学盛大に及び、了事外邦の往事伝聞も横文  
 に録して最詳なり。中にも仏国に造れる話説あり、之  
 を翻訳して秘する人あり。予素より好癖あれば、其書  
 を乞て模採し、之に画図を挟み、洋学執心の婦幼童男  
 の伽とす。その伝実に倭人の性情にも恥劣なき事感ず  
 るに堪たり。親子夫婦の恩愛深情、患苦を嘗て志願を  
 遂る、蓋勉強忍耐の至誠一にあれば、文明開化の聖  
 代、披閱の君子ひとへに志を採用あらば、編者の幸甚  
 しからむと序す。

該書は「孝行」「友愛」「貞操」「慈母」の事績の蒐集訳書  
 である「西洋列女伝」の先蹤とも称すべきものだが、さら  
 にこの序文は、「往事伝聞」を「話説」と言い換えて「西  
 洋列女伝」同様の「説話」観を呈し、行文に「西洋列女  
 伝」原著序文(前掲)とほぼ等しい『説話集編者』の相貌  
 を窺わせてもいる。

すでに指摘があるように、「説話」の語は近世以前にも  
 散見され、近世戯作の中には、中国白話(= narrative of  
 the event)の影響下、すでに「報讐ノ奇談」(自来也説話)

〔文化3 (1896) 年刊〕など、「説話」の語を含む書名も現れていた(小峯和明「説話の輪郭」〔文学〕2002)。翻訳物の「説話」への付訓「はなし」「ものがたり」から見て、訳語「説話」は戯作世界の「説話」を借用したものである。『自来也説話』は、明治10年代後半の近世戯作「翻刻ブーム」のなかで翻刻出版されたいが(前田愛「明治初期戯作出版の動向」〔近代読者の成立〕所収)、こうしてみると、近世以来の戯作出版とその受容が続いた明治初期、その同じ地平に翻訳の言語場も開かれ、近世以来の「説話」「話説」用法や「奇事」「奇譚(談)」への関心が維持されるなか、訳語選択においてfiction Ⅱ「小説」、narrative of that event, anecdote, account Ⅱ「説話」「話説」の差異化を図りつつ相応の「説話」観が醸成されるとともに、訳者たちのうちには「説話体作家」的言語主体も成立していたとみてよいのであろう。

翻訳物は単行の出版物だけではなく、新聞・雑誌にも掲載された。泉鏡花「名媛記」(明治33 (1900) 年)には「這少年は(引用者補、学校寄宿舎の)談話室に備へてあつた、郵便報知新聞の、行商りうしあずが、魔法使の薬を間違へて、驢馬になつて薔薇の花を食べる話、また鴻の鳥になつたばへみやの国王の話などに魅入られて」とある。『郵便報知新聞』翻訳物の読者たる履歴をもち(明治17 (1894) 年真愛学校に転学。11歳。同校購読の同新聞を愛読(小林輝治「石川近代文学全集1 泉鏡花」年譜)。尾崎紅葉に師事

した泉鏡花は、翻訳の言語場の「説話」観の受容者として、また近代戯作小説の継承者として、日本の伝奇伝承世界に分け入りその小説化をはかった作家という意味で、これら明治初頭の翻訳者たちのうちなる言語主体の系譜を引く「説話体作家」と呼べるのかも知れない。

### ■「説話」論のなかの「説話体作家」

さて、このようにして形成が推測される翻訳の言語場の「説話」観、また「説話体作家」的言語主体は、しかし「説話」の近代においては「エピソード」の域を出るものではない。江戸期の物語類が「小説本」と総称されるなか(可愛楼(渡辺)晴雪「小説本を読むの得失」〔読売新聞〕明治16 (1883) 年5月31日)、宗像和重「読売新聞」投書欄の近代「文学」2002に紹介)、翻訳の言語場で醸成された「説話」観や言語主体は明瞭な形をとる前に「小説」論の喧噪に表向ききき消された格好なのだ。このことは明治12年刊「欧州小説」哲烈福福譚<sup>てれましくわふくもがたり</sup>の角書に明らかである。そして坪内逍遙「小説神髓」の登場(明治16 (1883) 年草稿成る。第1〜3冊 明治18年9月、第4冊 明治19年3月、第5〜9冊 明治19年4月)。該書には訳文引用箇所「説話」の語が見え、その一つには「せつわ」の訓も施されているが、「自来也説話」を「見雷也物語」と記す逍遙に翻訳の場の「説話」観への顧慮はない。彼は一括された「小説」を前にして、H・スペンサーの社会進化論を背景とし

た人民啓蒙的な「文学（小説）革新論」の動勢に応ずる形で、「ブリタニカ」「ロマンス」「ノベル」条を参看しつつ「真の小説稗史（那ベル）」、「模写小説（ア、チスチック・ノベル）」を論じ、各「小説」の審級を「人情」「世態風俗」模写の深度如何をもつて判定する（柳田泉『小説神髓』研究、鈴木登美『語られた自己』など）。ここでは「奇異譚」（＝「羅マンズ」＝「荒唐無稽」と「小説」（＝「人情と風俗をバ写す」との峻別もなされるが、ともに「説話」の範疇にあるかとおほしい「奇異譚」と「浮（よ）ハイブル（寓言の書）」fableとを「深妙の旨趣」の有無をもつて「其外形ハ同うして其内質ハ同じからず」とし、後者に「猿蟹合戦の物語」「桃太郎の昔話」「舌切雀」「かちく山」を数えたり、その「進化変遷なしたるもの」が「隱微の寓意」に「人情」を写す「寓意小説（垂ルレゴリイ）」だとして、また、「小説」の一つに「宗教小説」を名指して「靈頭記利生記のたぐひ」を挙例するなど、いわゆる「説話」は彼の「小説」論に取り込まれ「奇異譚」「小説」

の双方に切り分けられていくのである。

問題は、こうした「小説」論の問題構制が「説話」の近代にどう作用したかだが、「小説神髓」の掲げる批評指標（「小説の裨益」へ高尚・勸奨懲誡・正史補遺・文学指標）、「脚色（しやく）の法則」へ「忌まざるべからざる病」＝荒唐無稽・趣向一轍・重複・鄙野猥褻・好憎偏頗（作者による主人公の）特別保護・矛盾撞着・学識誇示（物語の）永延長滞・詩趣欠乏・人物にして屢々長き履歴（筋）を語らしむる事）を軸とした「小説」論は、やがて国文学界に迎え取られて規範化し、説話集を「物語」と称して「小説」＝「文学」に取り込み、これを抑圧するにいたる。それは、三上参次・高津鉄三郎『日本文学史』（明治23（1890）年、第六章 歴史体の文「中等社会以下の、人情風俗を写したるものは、唯、今昔物語の類あるのみ」、『日本文学史』明治30年1月号所掲の『宇治拾遺物語抄』『今昔物語読本』広告、芳賀矢一『国文学史十講』（明治32年、第五講「中古文学の二」）、そして藤岡作太郎『国文学全史——平安朝

篇一」(明治38年、第四期平安末期第二章今昔物語)の「歴史的正確も存せず、個人的想像も見るべからず、しかもこの書の貴ぶべきは、当時の社会の風俗を見、公衆の思想を察するに、重大なる価値を存するを以てなり。……その頃の小説の資料に供せられたるもの多く、いづれも文学研究者に大なる趣味を与ふるものなり。」などに明らかだ。そうしたなか、〈説話〉論は、この抑圧とは無縁な場所、すなわち古典文献学の一領域たる神話学、その一部を構成する比較説話学のもとで明治30年前後に立ち上がるが(西尾光一「説話と説話文学」〈国語と国文学〉1959)、小峯和明前掲論文。なお、「帝国文学」明治28年10月号の「日本昔噺第十三編」書評に「予輩さきにメールヘンの棄つべからざるを説きしが」とある。またMünchenとともに「説話」の訳語の与えられる独語Sageは前掲「ブリタニカ」「ロマンス」条にも所見、まもなく、国民国家イデオロギーの形成をになわせるべく将来された国民文学(上田万年など)に即して国文学の「新国文学」化をすすめた芳賀矢一によって国文学へと組み込まれ(明治35年のドイツ留学からの帰朝後)、以後はそれへの比較説話学研究サイドからの反発、さらに比較説話学内部の理論闘争(神話研究と土俗学・郷土研究、その内部の見解相違)などをへて〈説話〉論は多元化していくことになる。それら多文化化した〈説話〉論と〈小説〉Ⅱ〈文学〉論、さらには隣接学芸諸分野をも視野におさめて〈説話文学〉論の体系化を企てたのが坂井衡平「今昔物語集の新研究」(大正12(1923)年)で、その影響下に

斎藤清衛「説話文学の本質」(『国語と国文学』昭和2(1927)年4月)が書かれ、次いで「新潮社・日本文学大辞典」〈説話文学〉(島津久基執筆、昭和11(1936)年)の〈説話文学〉定義が生まれる。島津解説は同期の柳田国男の〈説話〉論をなかに無視し、説話と説話集を分離して後者に〈説話文学〉を認定したのだが、以来、これを是とした国文学研究は民俗学と袂をわかち、それへの疑念の声が繰り返しあがりながらも、説話集を主たる対象とした〈説話〉研究が進められていった(岩波書店・日本古典文学大辞典)「説話文学」西尾光一執筆。

さて、こうして〈小説〉Ⅱ〈文学〉論の抑圧下に〈説話〉論が多文化し、〈説話文学〉論が模索されるなか、芥川龍之介が登場する。泉鏡花に親しみ、怪談・妖怪譚を好み、「聊斎志異」を繙く少年時代を送り、作家としてのデビューを「今昔物語集」に取材した「鼻」で飾り、「今昔物語集」(新潮社・日本文学講座)第6巻、昭和2年4月)に「生ま々々しさ」「brutality(野性)の美しさ」「作者の写生的筆致」を称揚し「今昔物語集」への愛を語って死に向かった彼は、明治初期の翻訳者や泉鏡花の跡を襲う作家として、いかにも「説話体作家」と称するにふさわしいかのごとくである。斎藤論文はかくいう。

現代作家の中で説話文学的のものを書いて成功した芥川氏の作品などを聯想すると面白い。……そこに芥川氏の風格の滲み出てる点は見逃されぬ。……内容にも表現にも、著者独特の風格の出ることを何よりも

欲しいと思ふ。これが過去の説話文学に対する第一の  
不満と共に、将来の説話文学に対する希望の一端であ  
る。

また、島津解説も「明治以降では、大正期の小説家芥川龍  
之介を、好んで『今昔』『宇治拾遺』の類に題材を求めた  
異色ある作家として特記して置きたい。」と記す。まさに  
『説話体作家』の認証といった趣だが、『説話』研究は、こ  
の認証と引き替えに『小説』⇨『文学』論の抑圧から解放  
され、以後、『今昔物語鑑賞』をバイブルに『説話』の  
『文学』を論じ、『説話集』に「著者独特の風格」を求め、そ  
うした研究の『文学』性を担保するために、『説話体作家』  
の認証を作家たちに与えていくことになる。しかしこれら  
は、おそらく作家たちの与り知らぬこと。芥川の場合でい  
えば、『鼻』のモチーフは自己像をめぐる vanity の問題  
領域にあるのであって『説話』語りにはない（後掲小論参  
照）。その意味で、『説話体作家』は近代に『登場』しない。  
登場するとすればそれは『小説』論の、したがって『文  
学』言説の抑圧のもとで『説話文学』を模索した『説話』

論の近代が創造した物語でのことだ。『説話体作家登場』  
の物語の流通。そして、多元化した『説話』論を足場に  
『小説』⇨『文学』論その他学芸諸分野の議論をも組み込ん  
で、『脱領域』的な骨太の『説話文学』論、否、『説話』論  
を構築した坂井衡平の仕事は、八十年間、置き去りのまま  
になった。

\*引用は「修辭及華文」「小説神髓」等⇨明治文学全集、「流  
別奇談」序⇨石川「明治初期戯作年表」、「西洋列女伝」⇨  
『Problematique I（文学／教育Ⅰ）』（2000.7）、「同Ⅱ（文  
学／教育Ⅱ）」（2001.7）、「Noble Deeds of Woman」⇨大  
英図書館所蔵本マイクロフィルム紙焼。なお、大英図書館  
所蔵本については、調査、紙焼資料入手に際し、英国国際  
教育研究所所長・凶師照幸氏、同所員 Markus Walner  
氏の協力を得た。記してお礼申し上げる。

\*芥川「鼻」については、「主体へわたし」考（『国語教育  
研究』41）、「同、続考」（『同』42）、「同、三考」（『論叢  
国語教育学』5）に述べた。

—— 広島大学大学院助教授 ——